

暗黒を照らす政治小説と戦後の闇を引きずる日本国

一九九七年の文学的成果として、金石範の大作『火山島』全七巻の上梓を上げないわけにはいかない。在日する朝鮮人作家の一人して一九七〇年代の日本文壇を騒がせた金石範も、齢七十を過ぎ、老作家と呼ばれる歳になったが、その文学精神に衰えはない。

一九四五年の解放以前、朝鮮人に対する日本語の使用が強制されていたことは周知の事実である。作家たちは日本語で創作させられた。そして彼らは解放後「親日作家」と呼ばれた。朝鮮人でありながら日本語で「日本国」を背負って書いたからである。その代表的な作家である李光洙は反民族行為処罰法によって罪を問われ、朝鮮戦争中に北に拉致されたと言われる。日本でもっとも有名だった朝鮮人作家張赫宙は、野口姓を名乗って日本人作家になった。しかし、そのほかの多くの作家たちは戦後も韓国で生きた。詩人白鉄は、金芝河事件のころには韓国ペンクラブの会長であった。また、戦前日本プロレタリア文学の代表的詩人であり、中野重治や宮本顕治とも交流のあった金龍済も最近まで存命であった。

日本語で書く朝鮮人作家の歴史は、一九四五年の八月を挟んで、「親日作家」から民族的自己主張の強い「在日朝鮮人作家」へと存在を転換させた。

一九九七年は、『玄海灘』などの小説で、戦後初期を代表する在日朝鮮人作家として知られた金達寿の生命の灯が消えた年でもあるが、金達寿や許南麒は、日本語で書きながら朝鮮を表現した。その後一九五〇年代後半には金石範が金泰生や金時鐘らとほぼ同時期に登場した。続いて李恢成・金鶴泳・梁石日らの活躍がある。この一筋の流れは、内向きの「日本文学」に対峙する、強い社会性を持った作品群を生み出していった。それは日本社会の排他性と、朝鮮の分断、及び韓国におけるファシヨ政権の存在を背景に持った。

ところが、昨今の在日朝鮮人の日本における諸権利の拡充のせい、ファシヨ政権が倒された後の韓国の「民主」化のおかげか、はたまた米日韓の敵、朝鮮民主主義共和国の貧困と政治的無能に愛想が尽きたためか、在日朝鮮人文学はおとなしい。いや、充足の社会で存在の困難を描く柳美里や、在日朝鮮人のアイデンティティを今日的問題として捉えようとする金真須美、在日と「大韓民国」「朝鮮民主主義人民共和国」とを串刺しに描ききろうとする元秀一など、第三世代とでも呼ぶべき作家たちは出てきている。しかし強く「日本」を否定するところから生み出される、「在日朝鮮人文学」独特のポジティブな気迫のようなものは感じられにくくなっている。

今年は冬季オリンピックが長野で開催され。六月には日本代表の出場が決まったワールドカップの本体会もある。わたしはオリンピックには興味はないが、サッカーには人並みに関心がある。しかしながら、試合開始前のあのセレモニーには嫌悪を覚える。胸に手を当て日の丸を見上げな

がら君が代を口ずさむあの場面である。最近では若者向けを狙って人気歌手にアカペラで歌わせている。まったく気持ちの悪いことだ。試合の応援もそうだ。日の丸はちまきの若者たちが手に手にその小旗を振って、あるいは巨大な旗を掲げている。彼らの多くはサッカーを通して同族意識をもち、スクラムを組んでフランスまで行くのである。その熱狂ぶりはもはや尋常ではない。これをナシヨナリズムと言わずにおれないのはわたしだけだろうか。

「自らを国民たらしとする者を国民とする」ならば、曙やロペスは「多民族国家日本」の「立派な国民」ということになる。日本に植民地支配された歴史を持つ在日朝鮮人も「日本国民」なのであるか。

昨秋、在日朝鮮人である呉徳洙監督作品「在日」を観た。この四時間を越える長編ドキュメンタリー映画の印象を語るとき、あまり良い顔を見せられない。もちろん在日の五十年という歴史を記録した力作であり大作である。前半の証言による歴史の検証は貴重な史料であるし、勉強になる。後半のパチンコ景品交換業を営む老婆の人生は実に生々しく在日朝鮮人の苦難の戦後史を映しだしている。しかし全体を通しての感想は、「昔は大変だったけれど今は良くなった。今は日本社会に溶け込んで自由に自己主張できるようになりました」といった印象なのだ。この映画からは変革の思想を窺うことはついにできなかった。それ程までに在日朝鮮人は安定して平和なのだろうか。そうではない。帝国主義日本は完全に過去のものとなったのだろうか。

帝国主義日本のポツダム宣言受託という敗戦を、「玉音放送」という形で「終戦」へねじ曲げることによって維持された天皇制の下で、在日朝鮮人の戦後史もまた屈折を重ねている。歪められた歴史の屈折の隙間から金石範らに在日朝鮮人文学は生まれているのだ。であるからこそ、その作品の「反逆性」が際立つのである。『火山島』の描いた済州島四・三民衆蜂起とそれに対する「大韓民国」政府の弾圧は、戦後東アジアにおける民衆闘争と、それに対する白色国家テロルの一環として位置づけることができる。つまり『火山島』の主題こそ、東アジアにトータルな歴史の核心をつくものであり、就中日本における元植民地出身者の歴史に連携する面の極めて強い性格を持っている、と言えるのである。

九七年には台湾において戦後東アジアにおける白色テロを追及する集会が開かれた。九八年には済州島で開催される。戦後史の暗黒から歴史の真実を明らかにするこのような運動の魁となつたのは金石範らによる文学の力である。

さて、日本人は自らを省みよ。暴虐な侵略の近代史の責任をとらないまま五十年を過ぎて、巨大な金融資本やゼネコンを国民の税金で養っている国ニッポン。いくらスポーツ競技のセレモニーだと言っても、一九四五年以前の「日本帝国」を象徴した日の丸を掲げ、君が代を歌って良いのか。一九四五年の八月十四日と十五日の意味をわれわれ日本人は問い直さなければならぬのではないか。

(『新いばらき』一九九八年一月一〇日号)